

外国人からみた岡崎の魅力 多文化共生を目指して

愛知学泉大学
教授 倉沢 幸



皆さん、おはようございます。新年早々ですので、新年のご挨拶としてベンガル語で、「シュボ・ノボルショ」と言います。あけましておめでとうございます。

今日のお話は「外国人からみた岡崎の魅力」について話してもらえないかという依頼があって、引き受け致しましたが、実は、私は日本に住んで38年にもなりますので、外国人の立場ということよりも、私が様々な関わりを持っている中で、岡崎をどのように、例えば外国人との関わりで考えるならば、どのようなことが見えてくるのかということを中心に、お話をさせていただきます。

従って、外国人からみた岡崎の魅力というよりも、私が関わりを持っていることから多文化共生ということを中心に、外国人との共生に関してはどのようなことが今あるのか、あるいはどのようなことをこれから我々が考えていくべきなのかということを考えていきたいと思っています。外国人と日本人が相互に住みやすい環境や社会、あるいは町をどのようにつくるかということ、皆さんが少しでも自分で考える、あるいは出来ることの参考になればと思っていますので、そのつもりで聞いて頂ければと思います。宜しくお願いします。

それでは最初は皆さんに伺いながら進めたいと思います。如何でしょうか。ちょっとしたクイズを出しましょう。

1. 岡崎在住外国人の数は？

およそ6千人 およそ9千人 およそ1万2千人 およそ1万5千人

岡崎在住外国人はどのくらいでしょうか？それでは4つ選択肢があります。皆さま、手を挙げて答えて頂ければと思います。どうでしょうか、6千人くらいだと思う方。ちらほらですね。それでは、9千人だと思う人。1万2千人だと思う人。1万5千人だと思う人。皆さん意識の高い方々が今日は非常に多いということで、私の方も驚いています。実は、この問題を出すのだいたい や を答える方が多いのです。今日は正解率が高く、8割以上の方が当たっていました。答えは 6千人 です。12月1日の岡崎市の統計ですと、1万2千人位ということ。世帯数では7,700世帯を超えていますので、かなりの世帯数ということになります。

これだけ多くの外国人が岡崎にいます。いわゆる在住外国人、岡崎の市民として捉えます。この数は岡崎市役所の方で集められた統計です。ちょうど1ヵ月くらい前の状況ですので、最新のデータということになります。ここで、全体的に把握するために申しませんが、県内の外国人総数、例えば名古屋市では6万人位、豊橋市は2万人、豊田市は

1万6千人です。この統計の日付は2007年12月ですので、その時点で岡崎市では1万1千人でした。今年の統計はまだ出揃っていないので、この一昨年前の統計では、全体的に県内の外国人総数は22万人です。細かい数字は少しずつ変わっていきませんが、おおよその感じとして理解して頂ければと思います。岡崎市の外国人人口は県内4番目に多い人口です。

もう少し進めてまいります。2番目のクイズです。

2. 岡崎にはどこの国籍の人が多いか？

韓国・朝鮮人 ブラジル人 中国人 インドネシア人 フィリピン人

1位から4位の順番として、どこの国の人が岡崎に多く住んでいるでしょうか？ 韓国人・朝鮮人は昔から多く住んでいますが、それに加えて、ブラジル人、中国人、インドネシア人、フィリピン人。この5カ国から選んで頂くとしたらどうでしょうか。1位はどこでしょうか。はい、1位はブラジル人です。2位はどうでしょうか。2位は だと思う方は？あるいは と思う方は？以前は韓国・朝鮮人が多かったのですが、今は第2位と第3位の差は非常に少なく、ほぼ同数になってきました。2位は韓国・朝鮮人です。3位の中国人もほぼ同数です。 から まで順位は出ましたので、4位はどうでしょうか。 インドネシア人だと思う方？少ないですね。そうすると フィリピン人、ということになりますが、その通りです。統計ではブラジル人が外国人人口の約50%を占め、続いて韓国人、中国人、フィリピン人です。岡崎では、インドネシア人は少なく、それよりもベトナム人やペルー人の方が多いいのです。世帯数も同様に比例しています。

< 岡崎市国籍別外国人人口集計表 >

国籍	総数	(%)	男	女	世帯数
ブラジル	6,012	50.02	3,214	2,798	3,444
韓国・朝鮮	1,789	14.88	859	930	1,044
中国	1,722	14.33	840	882	1,395
フィリピン	1,310	10.90	330	980	916
ベトナム	253	2.10	111	142	233
ペルー	174	1.45	84	90	92
インドネシア	98	0.82	61	37	87
：	：	(94.50)	：	：	：
在住外国人合計	12,020		5,910	6,110	7,769

(2008年12月1日現在、岡崎市ホームページより)

ここで注目したいことは、これまではずっと外国人の人口が増えていましたが、先月は少し下がりました。初めて外国人の人口の増加が止まって、少し減少したということ

になります。これはご存知のように、今の経済不況で様々なところで解雇の問題が起きています。仕事を失い、ブラジル人の中には帰国したりした人が一部います。そのため、今までは右肩上がりであった外国人人口は経済不況の中で多少止まっている、あるいは少し下がり気味であるということです。これについて後に触れさせていただきます。

ここで注目したいのは、わずか7カ国が外国人人口の95%を占めていることです。そして、韓国・朝鮮人の数が年々減っていることです。1990年頃、外国人の人口の3分の2が韓国・朝鮮人でした。それが今は3割を切っています。一方、ブラジル人の人口が増えてきました。

この韓国・朝鮮人の多くがどちらかという、日本でいわゆる「オールドカマー」と呼ばれている人々です。つまり昔から住んでおり、もう2世、3世になった人達が多い。中には一世の方もいますが、徐々に年を取って亡くなっています。3世、4世になると、日本国籍に帰化されている人もいます。そのため、相対的に数は減っているのです。統計は国籍をベースに捉えたものですので、韓国人のコミュニティということになると、その中に日本国籍の方も韓国人コミュニティの一部という形になる場合もあります。

< 岡崎在住外国人の推移 >

国籍/年	1990年	%	1995年	%	2000年	%	2005年	2008年
韓国・朝鮮	2,704		2,692	55	2,315	35	1,959	1,789
ブラジル	240		1,282	26	2,836	43	5,389	6,012
中国	170		341	6.9	434	6.5	879	1,722
フィリピン	125		278	5	452	6.5	879	1,722
ペルー	14		58	1.2	100	1.5	164	174
米国	37		49	1	57	0.9	80	72
その他	73		212	4.3	441	6.6	867	941
総数	3,363		4,912		6,635		10,473	12,020
(世帯数)	1,503	/	2,695	/	3,834	/	6,789	7,815

もう少し先へ進みましょうか。次のクイズですが、岡崎では何カ国の方が住んでいるでしょうか？在住外国人のおよそ95%は7カ国でしたが、どうでしょうか？

3. 岡崎に何カ国の方が在住しているか？

- 3カ国ぐらい 4カ国ぐらい 5カ国ぐらい
6カ国ぐらい 7カ国ぐらい

それでは、 だと思っ方はどうぞ手をあげて下さい。 だと思っ方。 だと思っ方。 だと思っ方、少ないですね。 だと思っ方、2～3名ですね。実は岡崎はかなり特殊

なところですが、岡崎の魅力を考える重要な要素です。岡崎に在住する外国人は65カ国を超えています。少し考えて頂きたい。何故そうなのかと。

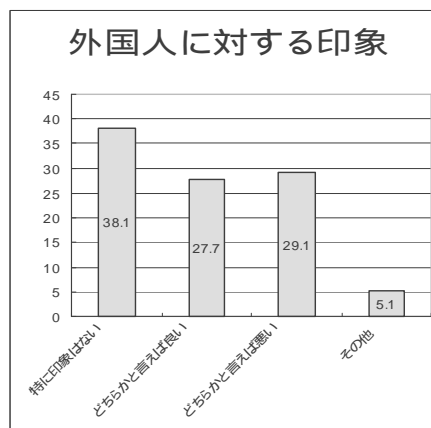
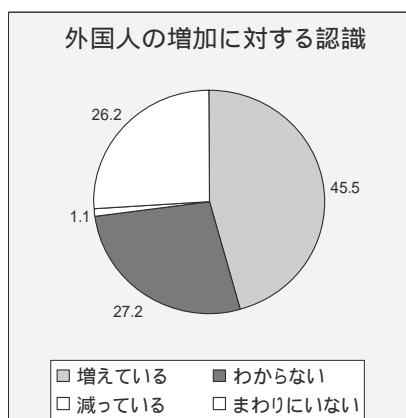
その前に、今の事情、要するに岡崎にこれだけ多くの国々から来た人々が住んでいるという事実を、岡崎市民はどのくらい知っているでしょうか。「知らないな」という声が出てきました。岡崎の魅力を皆さんで考える時に、このことも含めて考えなければなりませんと思います。

次に、これも重要なポイントですが、岡崎では外国人がどこまで歓迎されているのか、つまりウェルカムムードはどこまであるのかということです。それには、岡崎の市民は外国人に対するイメージや期待はどのようなものを持っているかが関係します。皆さんはどう思いますか。

岡崎に住んでいるならば、外国人も岡崎の財産であり、多様な人材として利用すべきではないかと私は考えます。例えば、文化紹介講座に参加してもらい、講演してもらいなど、色んなことが考えられます。様々な国について学べる催しものができる、多文化について学べる、多彩な国から来られた潜在的な人材が岡崎には既に住んでいるということです。岡崎の魅力と言えるのではないのでしょうか。ただし、岡崎市民はどう考えているかが重要です。

4. 市民の意識

ここに岡崎市民の意識調査の集計データがあります。数年前のものですが、それほど古いものではありません。これをみるかぎり、一般市民の大半は、外国人が増えていることを知らないということです。調査当時は既に9,000人以上の外国人が岡崎に住んでいました。「増えている」と45%の人が答えています。調査は2003年ごろのもので、統計では2000年の6,000人から2005年の10,000人へと、在住外国人は急速に増えていますが、多くの市民はあまり認識していません。「外国人が周りにいない」「わからない」という答えが過半数を占めています。

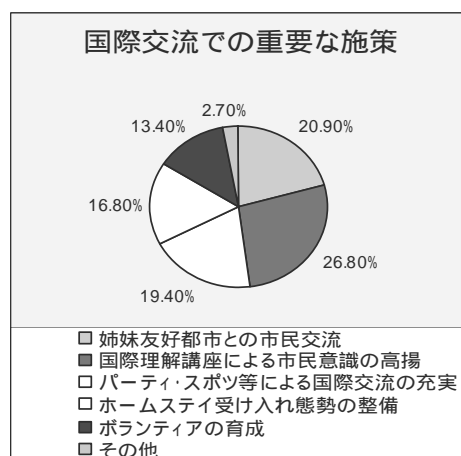
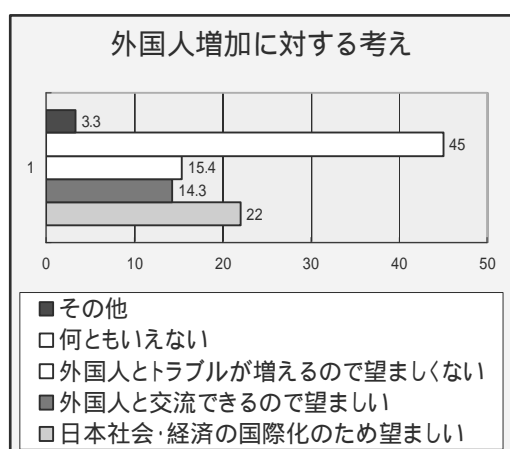


そして、外国人に対する印象について、この統計からあまり関わりのない状況が予想されます。関わりのないが、しかし印象が悪い。調査によると、「特に印象がない」は

38%、「印象が悪い」は29%、「印象が良い」は27%です。印象が良いというのは少数派です。

そうすると、岡崎では、冒頭で触れた外国人にたいして「ウェルカムムード」はあるかどうかということです。また、市民は国際交流として何を求めているかという調査もあります。私がこの調査を視て思ったことは、岡崎市民はどちらかというと、「イベント型・祭り型」の国際交流を求めています。喧嘩する国際交流は求めていません。しかし、共生というのはある意味で喧嘩、つまり摩擦を解消していく過程です。日常の様々なトラブルを解決していかなければならない。トラブルぬきで多文化共生は有り得ないと思います。

トラブルは異文化間の際間から生じます。それを解決しながら、共生をどうしていくかということを探ります。面倒なものです。市民はそれを求めている。そうすると、外国人が増えているとことに関して、ウェルカムというよりも、私は「招かれざる客だ」という状況があるのではないかと思います。調査では、「外国人と交流できるので望ましい」、「日本社会・経済の国際化のために望ましい」など、望ましいと考えている人は少数派で、「外国人とトラブルが増えるので望ましくない」、「何とも言えない」という意見が最も多い。（注：引用したグラフは岡崎市国際化推進プランを作成時に配布された資料から抜粋したものです）



共生というプロセスはトラブルなしで有り得ないというのが私の持論です。皆さんはどう思われますか。もしも共生はトラブルなしであり得ると思っていたら、それはどこか天国のことを求めていると思います。人間は互いに理解し合うためには、やはり摩擦が起こります。例えば、結婚して家庭を作って、ときには喧嘩して、雨降って地固まるという諺さえあるように、喧嘩の後、互いに理解し合うか、あるいはその逆になるかということでしょう。

統計で現れた岡崎市民の意識の背景には何があるか。先日、朝日新聞朝刊で外国人に関する特集記事があったので、参考のために、漫画で説明されている部分を切り取って持ってきました。

この記事で説明されている内容は、国民一般の意識です。岡崎だけではありません。「心の壁」が存在するとそれに伴う差別が現れます。アパートを探す時に、外国人だと入居は拒否される、あるいは職場で単純作業ばかりさせられ、昇進できない。あるいは



国籍や民族、肌の色による差別をなくすため、海外ではこんな工夫が...

法律で...	雇用で...	地域で...
外国人差別防止や人権擁護教育などを盛り込んだ「外国人処遇基本法」制定(韓国)	外国出身がわからないよう名前を匿名にした履歴書の導入(フランス)	同じ地域やアパートの住民がパーティーを開いたり、一緒に料理をつくったりして親交を深める(英国など)

グラフィック・船川 明子 / The Asahi Shimbun

〔出所：朝日新聞朝刊 / 2008年10月5日〕

「ガイジン」と言われ、外国人の子ども達が疎外感を抱く。夜、外国人が歩いていると怖いという苦情が出るなどの例が記載されています。実際に外国人を雇っている小規模企業がこのような苦情を受けたりすることがあると聞いています。犯罪を起こすというふうに思われていることもあるようです。警察官に職務質問されることもよくあります。

外国人との共生の課題は日本だけではなく、記事では下の方で対応策として3カ国の事例が載っています。まとめると3つのグループになります。 立法的措置、 抗体的

処置、信頼の構築です。一つ目は韓国の例で見ると、差別防止のため外国人処遇基本法を作ったりしている社会の事です。次はフランスのように、いわゆる「抗体的な処置策」と私が名付けたものですが、何らかの特別対応、例えば仕事を探す時に外国出身者であるという理由で断られることのないように、履歴書では匿名の使用を認めるようにしています。そして第三に、イギリスの事例であるように、地域やコミュニティで信頼を築くような活動をやっているなど、色んな形で共生の試みが行われています。

では、岡崎はどうでしょうか。後に触れますが、岡崎はそう悪い状態ではない、ということをもっと言っておきたい。但し、日本社会で外国人は、ほとんど、隣の外国人という「隣人」ではなく、「蚊帳の外」の人間なのです。蚊帳の外という状況は、蚊帳の外に置かれていない人には分からないものです。皆さんも、例えば転職などで、他の地域に移っていくと、なかなかそこに馴染むのに時間がかかり、受け入れてもらうのは簡単ではありません。その壁が厚くなってしまふことが、外国人である場合に生じる訳です。日本の社会的構造で、外国人の場合、この排他的な壁が非常に強く表面化する場合があります。先の新聞記事の例をまとめると、

- ・アパートの賃貸契約や入居を拒否される。
- ・職場でいつも単純作業ばかりさせられる。なかなか昇進できない。
- ・電車やバスで隣り合った日本人が、自分を恐れるように離れていく。
- ・子どもが学校で「ガイジン」と呼ばれ、いじめられる。
- ・「夜、外国人が歩いていると怖い」という苦情が雇い主などにとどく。
- ・たびたび警察官に職務質問されては不法滞在の疑いをかけられる。

ちなみに、私は警察に呼び止められたことは余りないのですが、学生時代に一度ありました。それも大昔の話です。学生時代に私が慶應義塾大学の博士課程に通っている時に、信号を待っていたら後ろから警察官が来て、「外国人登録証を見せろ」と命じられました。「何で見せなければならぬか」と尋ねたら、「法律です」と言われました。「それは分かっているけれど、僕が見せなければならぬ理由は何か。僕は、誰か犯人の顔に似ているとか、何か疑われているとか、何かの意味があって身元を調べているのですか？」と言ったら、特別理由はないとのことでした。「そうならやめて欲しい」と思いました。その頃は外国人の数が少ないものでした。私は留学生でした。当時留学生は3千人位でした。今は11万4千人位になっているので、全く桁が違います。その経験を友人に話したとき、「あなたは、日本の警察をいじめているのか？」とからかわれました。いや、強さがなければ日本にいられないということかもしれません。

冗談はさておいて、職務質問ではないのですが、実は2年位前、またひとつ経験しました。その時の警察の態度が、多分無意識にあらわれていると思います。豊田駅近くのホテルで忘年会に出席して、私は帰り道に眼鏡をどこかで落としました。ホテルを出て電車に乗ってから眼鏡がないことに気づきました。ホテルに問い合わせたら眼鏡はありませんでした。次の日、豊田駅近くの交番で、「眼鏡が届けられていないか？」

と尋ねたら、当番の警察官が最初は、外国人登録証を見せるように、荒っぽい口調で言われました。「外国人登録証を持っていません。私は日本人です。」と言うと、「そうですか、どうも失礼しました」と言って言葉遣いが変わりました。びっくりしました。日本社会の一面を見せつけられた気がして、これが実態なのかと思いました。蚊帳の外とは何を意味するか。諸外国の事例を少し触れましたが、ご参考になると思います。

日本で一般的に社会の秩序を懸念される方が多く、外国人が犯罪を起こすというような見方が結構定着しています。それが警察の態度にも表れるわけです。さらに、それを煽ぎたてるような報道や統計の提示のし方が、前から指摘されていることですが、こういった偏見を助長させます。昨年11月のことですが、ブラジル人が解雇され、ホームレスになったとニュースで紹介されました。その事のある会合で話したら、「いや、それは危険なことです。犯罪に走るかもしれない。外国人の犯罪が増えるかもしれない。」というようなリアクションがありました。

同じホームレスでも日本人の場合、犯罪が増えると思わないが、外国人のホームレスがいたら犯罪が増えるという心配する傾向はあります。何故そうなのか。やはり背景にある社会一般のそういった煽ぎたてられた見方が頭に焼き付いているので、それが影響していると思います。ここで外国人との共生に関して、社会秩序への懸念から、犯罪の温床、ゴミだしやマナーの問題、騒音問題の3つの問題を取り上げた中で、犯罪の温床に関しては、煽ぎたてられるものが多いので、少しマイナスして物事を考えていかなければならないと感じています。

2番目に、ゴミ出し問題とマナーの問題についてですが、これは確かに切実な問題として私が関わりを持っている岡崎外国人市民会議や岡崎市国際化推進委員会の活動でも出て来ています。たまたま私はある警察官の知人と話をしているときに、その方は長久手に住んでおり、新築アパートで若い一人暮らししている日本人が結構いるところで、町内会の仲間意識があまり定着していないような地域があり、「実は日本人のマナーも悪い」と言っていました。日本人も同様な行動をしているということです。そうすると問題の本質は何かと問うことが必要です。つまり、ライフスタイルに適合したゴミ出しのシステムになっているかどうかということを考えるべきです。単にマナーが悪いということで責められるものではないと思います。

私は社会学をやっていますが、日本社会は基本的には主婦が家に居るとことをベースにして、様々なシステムが出来ていると言えます。例えばゴミ出しのシステムも、若い共働きの夫婦で、早朝から出勤している人達には、果たして合っているのかどうかと考えるを得ません。多様なことを想定して、既存のあり方を再検討し、共生社会というシステムを築く必要があります。つまり、共生社会というのは、外国人と日本人の共生

よく耳にする事柄

< 社会秩序への懸念 >

- ・ 犯罪の温床
 - < 煽ぎ立てるような報道、統計の提示方 >
 - < 解雇されホームレスの登場、…取締る声 >
- ・ ゴミだし/マナーの問題
 - < 賃貸アパートで共通する問題という視点 >
 - < ライフスタイルに適合、システムの見直し >
- ・ 騒音問題
 - < 自宅近くの事例：子ども達のサッカー遊び >

だけではなく、日本の中にいる様々な人間との共生を考えると、ワンパターン化したシステムでは合わない状況が起こります。それが摩擦の現象を起こします。外国人だけではなく、いま述べたように、日本人が多くいるアパートで起こる問題と類似する場合があります。

3つ目は、騒音の問題です。例えば、ブラジル人だと彼らはパーティ好きで、大きな音をたててパーティをやることもあります。それを冷ややかな目で見ると、できれば時には一緒になって、パーティをやってコミュニケーションをはかり、日本のルールやしきたりを教えてあげることが共生ではないでしょうか。蚊帳の外という形で捉えるから違うわけで、過剰に反応する日本人もいるようです。

その例を取り上げますが、私の自宅の裏側は私道で車が入りませんが、子どもが小さい時にそこで遊んだりしていました。私の子どもが大きくなってもう遊ばなくなった頃の話です。近所の子供達が昼間そこでサッカー遊びをしている時に、近所の方が出てきて、「うるさい」と怒鳴っていたので、私は子ども達がかわいそうと思ったぐらいでした。ボールの音やキャーキャーと笑っているほどの騒音はあったが、それが受け入れられないような社会になってきているのかと。子ども達がそこで遊んではいけないだろうか。考えると、やはりちょっとオーバーにリアクションする人達もいるということです。しかし残念ながら、苦情があると、それを取り上げて、問題として何とかしなければならぬと思ってしまう人が多い。

問題を相対的に捉え、予想できる様相を少し掘り下げて見ることで、互いにもう少し住みやすい、子ども達にも住みやすい社会になっていくのではないかと思います。

5. 内面の国際化

岡崎の国際化や国際交流について若干述べますが、私は「交流から共生」の時代へ移行することが求められていると思います。時代の要請です。今少子化になって、海外から労働力が欲しい、活性化を目指す人材が欲しいと誰もが思うでしょう。世界経済がいま暫く悪い状況にありますが、今後、日本特有のこういった問題を乗り越えていかなければなりません。

もうひとつの潮流はボーダーレス化になっていることです。日本でこれを、国際化という言葉で述べることは多いようです。「国際化」とは比喩的にいうと「看板づくり」、あるいは外面そとづらのようなものです。英語の案内、多言語パンフレットなど、ある種の社会の「化粧直し」の部分、準備の部分、ハード的な部分であると言えます。

もうひとつ大事なものは「心の国際化」、つまり「内なる国際化」という試みです。これにはパターン化したものはありません。国際化はパターン化できます。これとこれをすれば国際化になると計画することができます。しかし国際性は模索から生じるものです。一人ひとりが模索していく個人的で、個別なものが多い。ただし、模索のための場面づくりが必要です。場面づくりのものとして、例えば、イギリスの事例を取り上げたように、国際性を育む模索の一部です。

時間が限られているので先へ進めます。ここで、岡崎について考えたいと思います。岡崎は地方都市です。しかし、極めて多くの国々から来た人々がここに住んでいます。どうしてでしょうか。産業の他に、岡崎には、大学が4つもあります。それから、国際的に知名度の高い国立分子研究所があります。多くの国から研究者が来たり住んだりしています。岡崎で住まなくても通勤は可能です。それでも岡崎に住むということは、何らかの魅力があると考えられます。

私が通勤している大学キャンパスは豊田市にあります。転勤で豊田へ来て岡崎に住む人も結構います。岡崎はこぢんまりしたまちで、自然環境に恵まれたところです。歴史のあるまちです。外国人でも、徳川家康が生まれたところとして知っている人もいます。岡崎は既にセールスポイントを持っています。これをどう活かすか。産業も、近代産業と同時に地場産業もあります。例えば八丁味噌。その他にも色んな小さなものが岡崎には沢山あります。地場産業に加えて、近代産業も持っていることが特徴と言えます。そして、ブラジルからの労働者も多く住んでいます。このような多くの外国人とどのように接するかと考えるときに、基本姿勢として、時代に適した認識形成が必要だと、私は思います。

先ず日本社会の構成員はかわったという認識です。従来型の社会は、日本国民のみによって構成され、日本民族の社会であった。政策的単一民族社会が形成されたものです。明治維新以降、国家政策の一環として単一民族意識が国民に植え付けられ浸透しました。このように形成された単一民族国家の長所と短所があり、「日本人馴れ合い」の社会になっています。

ところが、最近は事情が変わり始めました。現代社会は日本人と在住外国人、そして日本人の場合も、日本民族と非日本民族、つまり日本国民は日本民族だけではなく、私のような日本へ帰化した者や、日本生まれ日本育ちの外国人とされている子供達を含む社会になりつつあると言えます。言い換えれば、日本人あるいは日本国民とは何か、その定義や意識が問い直される時代になっています。

在住外国人、いわゆる永住している人々も日本社会の構成員です。このような認識に立つと、外国人と日本人の間にある壁が、おのずから揺らぎ始めると思います。そして、新しい社会の息吹が生まれます。その兆しは既に現れています。多民族的日本人「multi-ethnic Japanese」社会への変容が密かに進んでいます。日本は多民族国家ではないが、しかし民族そのものが今、多民族的になりつつあります。一民族の日本人ではなく、日本国民として多民族的日本人という新しい概念がこれから必要になってくると思われる。

<時代に適した新たな認識の形成>

従来型

日本国民 = 日本民族

<政策的単一民族社会>

社会構成員

現在の状況

日本国民 日本民族 + 帰化など
+ 在住外国人(永住権)

(multi-ethnic Japanese / 多民族的(的)日本人?)

日本生まれ・日本育ちの子ども達

実は20年程前から山形県農村部で花嫁不足が起こり、「アジアからの花嫁」という言葉が生まれました。山形からスタートして、全国的に広がりました。その子ども達が次第に大きくなって「日本人」になっています。今や日本では結婚件数の20組中1組は国際結婚という、外国人との結婚が進んでいます。5パーセントにも達するこの傾向は隠れた形で日本社会に異民族的結合をもたらしています。

以上のような諸々の変化を踏まえて、日本社会を構成する人々とはだれかという認識の形成が求められています。

6. 岡崎市の取り組み

多文化共生に関して岡崎について述べるならば、岡崎ではもう既にパラダイムシフトというか、いわゆる視点を変えてみる動きが始まっています。岡崎市役所では2004年に国際化推進プランを作成しました。2010年までの7年間の主要施策目標が盛り込まれました。プランではポイントになったのは、市民と一緒にやって国際化を進めることです。市役所で抱えていたことを、市民と一緒にやらない限り、市民の意識も関わりも増えない、そして共生社会への試みも市民の方から動きがないと実らないということです。

市民との関わりを増やすことが少しずつ進んでいます。2006年に「多文化が響きあう魅力のある地域づくりへ」というテーマで1回ラウンドテーブル、それ以降、外国人市民公開会議として2007年には「グローバル市民の時代にふさわしい市民交流・多文化共生」、同じく外国人市民公開会議として2008年は「グローバル市民の地域づくり、岡崎市民にふさわしい多文化共生を考える」と続けました。

多文化というテーマで、まちづくり、地域づくりを考えることで、外国人には自分が住んでいる地域社会に興味と関わりを持つこと、そして同時に日本人の方にも多文化の意識を高め、共生を模索して行くことが重要です。これが動き始めたので、今後はさらに進んで行くことを期待します。

私が岡崎で関わりを持っている3つの活動について触れます。まず外国人市民会議が発足されました。日本国内でまだ数カ所しか見られない制度ですが、もっと重要視し、発展させていくべきです。次に、岡崎市国際化推進委員会です。外国人委員もいますが、日本人を中心とした委員会です。岡崎市の多文化共生や国際交流を推進する提言などを行うことが目的です。会合は少ないですが、もう少し強化すべきです。最後に、岡崎市総合計画、今作成中ですが、今後12年間の岡崎の基本計画のことです。この長期計画の中で、「外国人市民と共生に向けたコミュニティづくり」を行なうということが文章化されました。岡崎市の展望を示すものです。これからどう実現していくかということになります。様々な努力が必要です。

現実的な問題を少し把握しておくために申しますが、外国人をまとめて、外国人という分類として捉えないことが重要です。もちろん国別の違い、そして個人として各人の違いはありますが、外国人を特徴的な3つのグループとして認識したいものです。

具体的にいうと、ひとつのグループはいわゆる社会的意識の高い外国人、その多くは教養が高く、大学教員、研究員、あるいはIT産業など、専門職に従事する人達です。このような人は自ら社会で活躍しようと考えている人達ですので、社会との接点を多く持っています。この人達は主に積極型で、バイカルチャラルです。多文化主義的立場と日本文化を理解する意識を持っている人です。

現実の把握

<対策への結びつき>

様々な外国人

・社会的意識の高い「外国人」

<バイカルチャラル、積極型>

・いつのまにか「外国人」

・仕方なしに「外国人」

疎外された外国人

もうひとつのグループは「いつのまにか外国人」になった人達といえます、例えば、外国人の子ども達はあんまり意識を持たずにして外国人として疎外され、あるいは日本生まれ日本育ちの外国人、それこそ韓国の人達、いわゆるオールドカマーの人達もそうです。民族的な意識は多少持っていたとしても、文化的には日本に同化しているところがあります。子ども達の場合もそうです。彼らはまだ何色にも染まってないにも関わらず、法律上の身分はともかく、社会的にも外国人にされている人達です。

そして「仕方なしに外国人」というグループ、つまり外国人である以前に、日本での最たる目的は出稼ぎです。他にあまり関わりを持たない人達です。日本人の文化的嗜好と欧米人の優位的扱いのなかで、彼らは疎外された外国人になっている場合も見られ、国際交流や異文化理解のイベントに参加する度合いは低いのです。

このような3つのグループを背景にして考えると、多文化共生を目指すための異なる多様なアプローチが必要です。多文化共生のハードとソフトの側面があります。ハードのものは、設備や施設など、ファシリティということになります。多文化交流センター、多言語の案内、職員とボランティアの配属はハード的なものです。

<多文化共生のハードとソフトの構築>

ファシリティ(施設・設備・便宜性)

<交流センター、多言語案内、職員・ボランティア>

人間的な部分、こころ(文化・価値観の影響)

<共生による「プラス・プラス」の関係/システム>

キーワード:「居心地」

住みたいまち岡崎 <子どもの教育>

多くの外国人が訪れるまち岡崎 <観光立国>

多文化共生のソフト的な部分は人間性に関わってくる、極めて人間的な部分です。一言で「心の国際化」とその意識の育成です。多文化共生にプラスになるような環境を構築することになります。岡崎で在住する多様な外国人を財産として考え、プラスとして使えるということは可能ではないでしょうか。

7. 住みやすいまちにするために

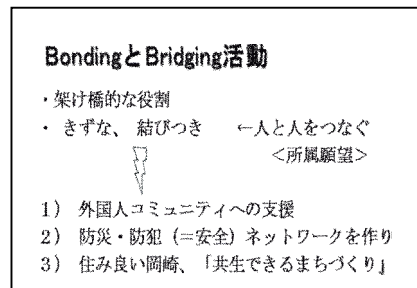
多文化共生を考える時に大事なキーワードは「居心地」です。居心地の良さです。従って、居心地の住みやすい町づくりが目標です。日本人にも外国人にも住みやすい町です。外国人とその家族にとって大事な要素は子どもの教育です。外国人の子ども教育に関して岡崎はまだ遅れています。国立研究所の研究員など、専門職の有能な

外国人は多く岡崎にいるにせよ、定住する人はどのくらいいるでしょうか。岡崎では外国人の子どもが通えるようなインターナショナルスクールはありません。子どもがいる親は岡崎を離れざるを得ません。

子どもの教育は重要で、私はかねてから市の方々に申していますが、今日は皆さんにもお願いしたいと思います。さしあたって今の外国人の子ども達、例えばブラジル人の子ども達の中で学校へ通えない、学費を払えないためブラジル人学校へ通えない、様々な問題で日本の学校にも行っていない子どものために、あるいは高校や大学への進学のために金銭的支援や援助を差し伸べるような、奨学金制度を作ってはどうかという提案です。企業や個人から資金を集めて基金を設立すれば、岡崎の財産、市民の財産として外国人の子ども達の教育の重要なサポート制度となります。それこそ岡崎が誇れるものなると思います。

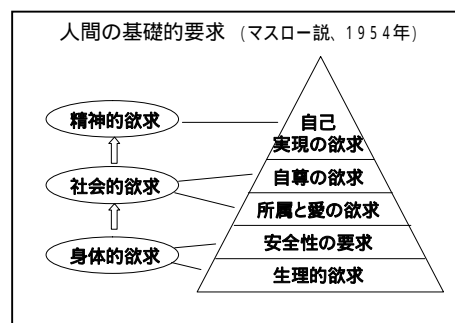
多文化共生のハードとソフトを進めることで、他のセールスポイントも生まれます。日本を観光立国にしようと外務省が宣言を掲げています。多文化共生のまちとして岡崎の試みは、外国人が好んで住めるまちだけではなく、外国人が訪れる、観光に来てくれるまちとして魅力を増します。岡崎はその素質を持っています。

居心地の重要な要素には社会参加型の人間関係です。オーストラリアは移民の多い国です。外国人を社会の一部として受け入れる活動として「Bonding & Bridging 活動」を行なっています。外国から来た人達との架け橋的な役割を市民組織（NPO）や地域の人達が果たしています。それを「Bridging」と言っています。それに加えて、「絆、仲間」として意識を高めていく活動「Bonding」を通して社会とのつながり、人間関係を構築します。このような活動を通して、外国人も様々なボランティア活動にも参加するようになります。



日本に住みながら日本社会との関わりを持たないような状況は決して好ましいものではありません。外国人のコミュニティを作る支援、防災・防犯のネットワークづくりに取り組んでいくなどが必要です。一緒になって共生できる岡崎のまちづくりを考える、ゴミ出しや騒音などを冷静に考え、対策を話し合うことから絆が生まれます。

人間にとって、身体的欲求、社会的欲求、精神的欲求は基礎的要求です。生理的欲求、安全性の欲求について、所属と愛情の欲求、自尊心と自己実現の欲求が続きます。このような要求は人間誰もが持っているものです。この欲求を閉ざされるような社会になると、そこで様々な問題が生じます。人間の隠れた



このような要素を含めて、多文化共生を検討すべきではないでしょうか。例えば、先ほ

ど紹介した新聞記事のような状況を少しでも解消するような試みが必要です。

いま岡崎で欠けているものはコミュニティ、外国人との共生するコミュニティ意識は不十分です。インターナショナルスクールはこれからの課題として、日本人児童にも、国際理解教育をしていくときに体験させることが重要です。壁や差別とは何か、実際に体験させてみる、外国人児童の未就学の問題など、共生には多くの方策を考える必要があります。市民としてできること、市行政としてできること、県や国に働きかけること、様々です。

ちなみに、特殊学校としてブラジル学校があるにしても、様々な弊害を持っています。卒業生は日本の学校へ進学できない問題もあります。だからこそどうするかということです。有能な人材を招くならば、それなりの社会的投資や準備が必要です。インド人のITエンジニアの事例ですが、東京で在住しているインド人達が集まって子弟のための私塾を始めました。インド人の数学教育は進んでいると思われ、その塾に日本人の子ども達も通っています。

オーストラリアの事例ですが、医師不足で外国人医師を招くために、その子ども達の教育費を免除し、つまり特権を与えて人材を呼び込んでいます。人材はそのまま集まる、あるいは定着するわけではありません。全日空の事例ですが、全日空では多くの外国人のパイロットを雇っています。ところが、パイロットとして育てたあげく、辞めてしまう問題が生じました。彼らと話しをする中で出て来た問題は、長時間、そして不規則な時間帯で仕事をしているため、学校で子どもの行事があるときに、出席できないなどの不満がでました。それを代行してくれるサポート制度などの改善によって、パイロットの定着率が高まったようです。

おわりに

岡崎は良いまちです。立地条件、交通の便、コンパクトな町として、あるいは自然が豊かな町としてもそうです。私は岡崎に来た時に、岡崎は少し奥へ行くと別荘地として最適と思いました。お金がなくて買えませんが、とにかく、これだけ近くに便利で良いところであると思いました。自然があって、歴史があって、伝統があって、それに活力の基盤もあります。ものづくりの町、そして大学や研究所もあることが活力の基盤です。さらに、人々の気質としては、岡崎の人々はあまりすれてないというと語弊があるかも知れませんが、好きです。素朴で付き合いやすい人々が多いということ、岡崎のセールスポイントとして最後に強調したいと思います。

話は少し長くなってしまいましたが、終わります。ご静聴ありがとうございました。